

新しい街づくりの試み (2)

吉 澤 昌 恭*
貫 名 貴 洋**
山 内 昌 斗***

第Ⅱ部 横川地区を超えて

第4章 横川駅周辺の再開発

4.1. 横川駅前交通結節点改善事業

(1) 2004 (平成16) 年3月28日

2004 (平成16) 年3月28日に、「横川駅前交通結節点改善事業およびレトロバス復元完成記念式典」が開催された。これは、横川駅前交通結節点改善事業 (電停移設, 広場整備, 交差点改良, 駐輪場整備, 駅舎改築) の完了並びにレトロバス復元の完成に際して、当該事業に対する地元関係者の協力・支援に感謝の気持ちを表わし、地域の益々の発展を祈念するために開催されたものである。

式典の主な内容は、①国土交通省中国地方整備局広島国道工事事務所長・広島市長・西日本旅客鉄道株式会社広島支社長・三篠地区社会福祉協議会会長の式辞、②工事経過報告、③レトロバス並びにモニユメントの除幕式等であった。

(2) 契機としての電停移設

横川駅前交通結節点改善事業において、最も重要だったのが電停移設である。写真4-1と写真4-2を比べれば、横川駅周辺の改善事業がどのようなものであったか、おおよそ理解できるだろう。国道54号線上にあった・広島電鉄の路面電車の停留場が、駅前広場内に移されたのである。このことによって、横川駅と路面電車を利用する者の利便性は大いに高められた。

* 広島経済大学経済学部教授

** 広島経済大学経済学部講師

*** 広島経済大学経済学部講師



写真4-1 改善前の横川駅周辺

広島国道工事事務所・広島市・西日本旅客鉄道株式会社・広島電鉄株式会社作成のパンフレット（2002年10月）より



写真4-2 改善後の横川駅周辺

国土交通省・広島市作成のパンフレット（2004年3月）より

こうした電停移設によって、国・広島市・広島県警が狙いとしたのは、国道54号線にあった電停のために生ずる交通渋滞の解消であった。しかし、電停移設に対する横川商店街の態度には微妙なものがあった。4.2.で、そのことを論ずることにするが、その前に、広島電鉄株式会社と路面電車の関係について触れておこう。

(3) 路面電車存続のための努力

広島電鉄株式会社の旅客輸送事業は、①市内バス、②軌道線（路面電車）、③郊外バス、④鉄道線を4本柱としている。この中で、②が最大の比重を占めている。そして、これまで、路面電車存続のための様々な努力が積み重ねられてきた。軌道敷内諸車乗り入れ禁止、交差点内軌道敷内停車禁止ゾーンの設置、電車優先信号の設置、路面電車運行状況表示装置の導入、停留場の整備等である。

広島電鉄株式会社常務取締役であり、また電車カンパニープレジデントである中尾正俊氏は、路面電車を媒介にしての街づくりに関して、高い見識を持っておられる。同氏は、フランス（ストラズブル、オルレアン、リオン）やドイツ（フライブルグ、カールスルーエ）の諸都市における・路面電車を中核にした街づくりを調査・研究されており、その知見が横川駅前改善事業にも生かされたものと推測される。

4.2. 商店街と行政の不和

(1) 「公務員が来たらバケツで水をかけろ」

横川商店街振興組合副理事長であり・広島かよこバス活用委員会（後述）事務局長の村上正氏によれば、横川駅前⁽⁴²⁾の立地を生かして廃墟の街から這い上がってきた横川商店街の店主たちは、それなりに自信を持つ一国一城の主であり、秩序や規制を持ち込もうとする公務員を目の仇にしたという。村上氏が家業を継ぐに際して、「公務員が来たらバケツで水をかけろ」と先達から言われたそうである。

こういう状況であったのだから、広島電鉄の電停移設問題が提示された時、横川商店街の人々は、「商店街の分断だ！行政の思い通りにはさせないぞ」と息巻き、電停移設に反対したのであった。しかし、1996（平成8）年に「横川ふしぎ市」が始められた頃から、横川商店街の人々の電停移設に対する態度は微妙に変化していったようである。

(42) 広島市三篠公民館編集『RETRO BUS 市民活動の現場から』広島市ひと・まちネットワーク 広島市三篠公民館、2005、47-49頁。

(2) 「横川ふしぎ市」がもたらしたもの

3.1.で述べたように、①横川ふしぎ市は行政の側からの働きかけによって始まり、②地域の諸団体との連携の下で進められていった。行政の側からの5年間の補助金は、商店街の構成員の行政に対する見方を微妙に変えたと思われる。

また、横川ふしぎ市を介しての、商店街構成員と地域の諸団体の連携によって生み出された人間関係は、電停移設問題に新たな光を投げかけることになった。電停移設の是非を、横川商店街の利害の観点からのみ論ずる、ということは難しくなっていたのである。つまり、地域住民の利便性という視点が入ってきたのである。

三篠地区社会福祉協議会会長の水戸川旭氏は、地域住民の声を代弁して、電停移設を支持されたそうである。そして、「横川の交通機能を高めて街の繁栄を目指そう」という基本合意が次第に形成されていったのである。

(3) 西村正氏の調整作業

このような基本合意形成に際して、広島市の道路計画課課長補佐（当時）西村正氏が果たした役割も見逃すことができない。西村氏は、電停移設問題に関して、「10年以上も了解が得られていないのだから、こりゃあすぐには動かん⁽⁴³⁾」と思われたそうである。

「行政は電停を移設したいだけ、交通渋滞を解消したいだけ」という横川商店街の人々の思いを払拭することの重要性を、西村氏は悟られたようである。そこで、電停移設を軸にして横川駅周辺を改善すれば地域の活性化につながる、という視点が前面に打ち出されていったのである。

「今度の担当者はチョット違う。ズケズケ生意気な事をよく言うが、親身に横川の立場を⁽⁴⁴⁾考えて提言してくれる。」このような評価を、西村氏はまもなく確立したのである。筆者たちが行ったインタビューで、「2～3週間で横川の人々に受け入れてもらえるようになった」と、西村氏は述べられた。その後、西村氏のダイナミックな諸種の調整作業を経て、2004（平成16）年3月28日の、「横川駅前交通結節点改善事業およびレトロバス復元完成記念式典」挙行の運びとなったのである。

横川駅周辺改善事業についてはこれぐらいにして、レトロバスの復元に議論を進めることにしよう。

(43) 広島市三篠公民館編集，前掲書，58頁。

(44) 広島市三篠公民館編集，前掲書，48頁。

4.3. レトロバス復元を介しての人的交流

(1) レトロバス復元の会

「はじめに」でも述べたように、1905（明治38）年に、横川と可部の間で乗り合いバスの運行が開始されたことを記念して、レトロバスのモニュメント設置構想が持ち上がり、それが、やがて、レトロバスを復元しようという方向へ展開していった。2002（平成14）年8月28日に、「レトロバス復元の会」が設立されたのであった。

原田陸民氏が会長となり、①総務部会、②広報部会、③車両部会、④運行部会が設けられ、各部会の活動が開始された。総務部会は全体計画の作成、各部会の調整並びに資金集めに従事し、広報部会は広報活動やイベントの実施に当たった。このイベントのひとつとしての・子ども音楽劇「レトロバス物語」については、5.2.(1)で述べることにする。車両部会はバスの制作に取りかかった〔5.1.(1)で述べる〕。そして、運行部会は、2004（平成16）年3月28日の、横川－可部間のパレードに備えたのである。

(2) 資金集め

総務部会は、最終的には、2,700万円もの資金を集めることに成功した。大口の資金提供者を挙げると、300万円を提供したのが、広島電鉄株式会社、株式会社フレスタ、横川商店街振興組合の三者であり、50万円を提供したのが、広島市農業協同組合、株式会社モルテン、オタフクソース株式会社、三篠文化協会、中国建設協会の五者であった。この他、多数の企業・団体・個人の資金提供があった。

これら資金提供者の内、フレスタについて若干のことを述べておきたい。第2章で、6商店街とフレスタの共存共栄の模索について論じた。今日、横川商店街とフレスタの関係は、ますます良好なものであるように見える。しかし、筆者達が取材した所によると、フレスタの存在を心よく思わない商店主がかなりいたそうである。ところが、フレスタが300万円の資金を提供し、その後もレトロバス復元事業に様々な形で協力したことにより、横川商店街の構成員のフレスタに対する好感度は大幅に上昇したようである。そして、フレスタを代表したのが、常務取締役の山城武之氏であった。同氏は、フレスタと横川商店街とのつなぎ輪の役割を果たしたのみならず、レトロバス事業に協力した企業の幾つか（新庄みそ、オタフクソース、カルビー）とのつなぎ輪の役割をも果たしたのである。後者については、6.2.で述べることにする。

(3) 可部カラスの会

「可部カラスの会」という組織がある。新澤孝重氏によれば⁽⁴⁵⁾、この会は、行政と市民の間にあって、楽しみながら自分達の街をよりよくしていこうとする市民ボランティアグループの性格を持つ。1996（平成8）年度の安佐北区役所主催事業「みんなでつくろう可部のまちワークショップ」参加者の一部が中心となって、1997（平成9）年3月に「可部カラスの会」が結成されたのであった。

この「可部カラスの会」は、レトロバス復元事業に早い時期から関与した。2002（平成14）年8月28日に実施された「レトロバス復元の会」の設立総会に、可部カラスの会の7人のメンバーが参加し、同会代表の友廣大造氏が、レトロバス復元の会の3人の副会長の1人に選出されたのである。

(4) おやじ活性化委員会

レトロバス（かよこバス）をめぐる動きを論ずるに際して欠かすことのできない存在が、「おやじ活性化委員会」である。この会の構成員は、造園業者、デザイナー、写真家、居酒屋経営者、広島市の公務員と多彩であり、彼らのヴァイタリティーには舌を巻かざるを得ない。

広島市の公務員として、且つ「おやじ活性化委員会」のメンバーとして、レトロバス復元事業に携わってきたのが、松林俊一氏・松岡友夫氏・木村眞治氏・両見修司氏・地井漁夢氏である。こうした人々の存在の故に、「レトロバス復元の会」と行政（とりわけ、広島市）との連携はスムーズに進んだようである。「公務員が来たらバケツで水をかけろ」と言われていた時代^{かくせい}と比べると、隔世の感がある。

第5章 「かよこバス」

5.1. バスの復元と「かよこ」の嫁入り祭

(1) バスの復元

2001（平成13）年5月23日に、広島市より、横川駅前交通結節点改善事業の一環として、レトロバスのモニュメントを設置する構想が提示された⁽⁴⁶⁾。ところが、その二カ月後に、実際に運行可能なバスを作ってみてはどうか、という話が持ち上がった。

(45) 広島市三篠公民館編集，前掲書，35-38頁。

(46) 広島市三篠公民館編集，前掲書，69頁。

「500万円もあればバスはできる」という説から、「2,500万円から3,000万円はかかる」というマツダの関係者の話まで、様々な意見が飛び交う中、「バスを作ってみてはどうか」という話が持ち上がった1年余り後に、「レトロバス復元の会」が設立され〔2002（平成14）年8月28日〕、バスの制作が始められたのである。最終的には、バスの制作費用は約700万円であった。

バスの制作は、上屋部分の制作と足回り部分の制作に分けて行われ、最後に両者を合体させるという形で進められたのであった。⁽⁴⁷⁾上屋を制作したのは、広島市立大学助教授の吉田幸弘氏・「おやじ活性化委員会」の一員である間宮研爾氏（造園業）・「可部カラスの会」の代表である友廣大造氏（鋳物業）を中心とした人々であった。他方、足回り部分を担当したのは、マツダのOBで広島国際学院大学自動車短期大学の益永茂治助教授・デザイナーの渡邊啓介氏達であった。

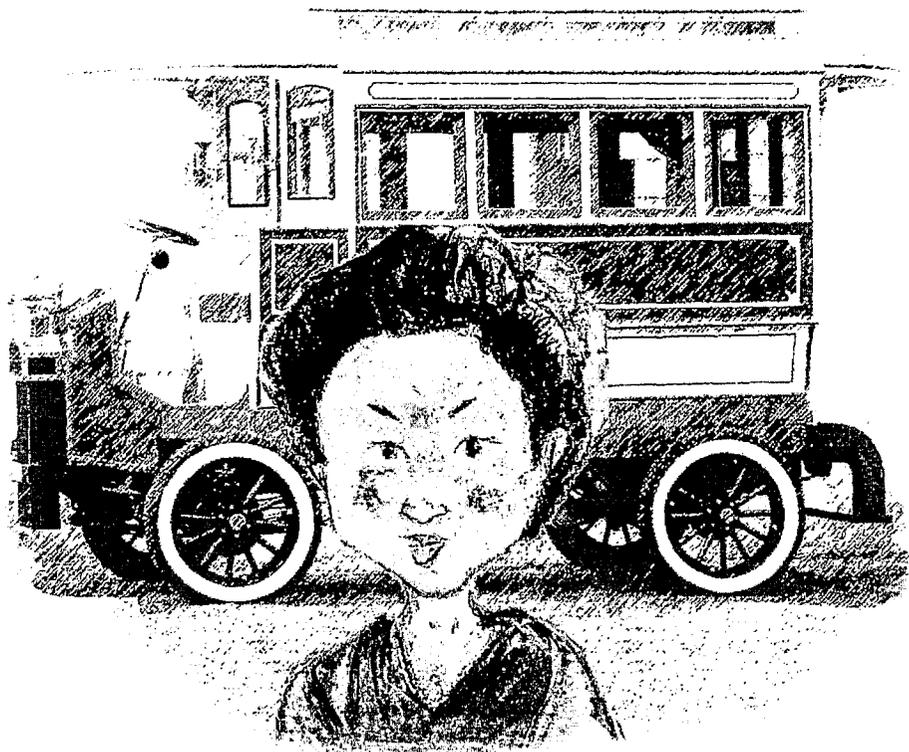
また、縄田健次氏の果たした役割にも触れておきたい。同氏は、二科会デザイン部〔2005（平成17）年10月現在、会員数106名〕の副代表であり、プラスアルファコーポレーション株式会社の代表取締役である。縄田氏は、シンボルマーク、オリジナルTシャツ、バナー、横断幕、車両のイグニッションキー、車内に取り付けられた記念プレートのデザインに携わったのである。尚、縄田氏も「おやじ活性化委員会」の一員であることを付け加えておこう。

(2) 「かよこ」誕生

レトロバス復元の会に、①総務部会、②広報部会、③車両部会、④運行部会の4部会が設けられた、ということを4.3.(1)で述べた。運行部会で、フレスタの山城武之氏は、「イベントを盛り上げるためにはレトロバスにちなんだ地元のお土産があった方がよいのではないかと提唱したそうである。そして、お土産の商品化が進められる中、イメージ・キャラクターとして「かよこ」が生み出されたのである。2004（平成16）年1月16日、商品開発会議の席上、「可部の『か』と横川の『よこ』をとって『かよこ』という名はどうでしょうか」という提案が山城氏によって行われたことが、「かよこ」誕生の発端となった。

この提案を具体的な企画案にまとめたのが、縄田健次氏と福本英伸氏であった。縄田氏のプロフィールについては、5.1.(2)で述べた。福本氏は広島市三篠公民館に勤務するかたわら、レトロバス（かよこバス）をめぐる動きの中で最も重要な位置を占めている人物であり、「おやじ活性化委員会」の一員でもある。同氏が「か

(47) 横川商店街広報部『マイシティ“よこがわ”かわら版・第17号』、2004年11月。



絵5-1 かよことレトロバス 福本英伸氏作

よこ」の生みの親であり、「かよこ」をヒロインとした「かよこ物語」を創作し、そのアニメーション化まで行ったのであった。

(3) 横川から可部へのパレード

2004（平成16）年3月28日の「横川駅前交通結節点改善事業およびレトロバス復元完成記念式典」〔4.1.(1)参照〕終了後、レトロバスを中心にした、横川から可部へのパレードが行われた。たいへんな盛り上がりを見せたそうである。

5.2. 子ども音楽劇「レトロバス物語」と映画「横川サスペンス」

(1) 子ども音楽劇「レトロバス物語」

レトロバス復元事業を盛り上げるために様々なイベントが行われたが、それらの内、子ども音楽劇「レトロバス物語」と映画「横川サスペンス」に触れることにしよう。



写真5-1 レトロ（かよこ）バス
広島市立大学にて松浦康高氏撮影

横川駅の北側にあるのが三篠町である。この三篠地区の学区子ども育成協議会主導の下に行われたのが、子ども音楽劇「レトロバス物語」の上演であった。劇作りを通じて、明治期の人々が車作りにかけたロマンと情熱を子どもに伝えるということが、上演の目的とされた。

3.2.で言及した・演劇集団「ブンメシ」が演技指導に当たった。4カ月の練習を経て、2003（平成15）年11月8日、三篠小学校体育館で、子ども達の劇が上演されたのである。

(2) 映画「横川サスペンス」

2005（平成17）年9月3日から、横川駅近くにある「横川シネマ」で、映画「横川サスペンス」が上映された。この映画の中で復元されたバスが走っている。3.2.で言及した「シータプロジェクト」代表の神酒大亮氏が監督を務め、「ブンメシ」の末田晴氏が脚本を書いている。また、「ブンメシ」の河村竜也氏・末武太氏が映画に出演している。そして、ヒロイン役に女子学生がスカウトされた他、オーディションで「おやじ役」の5人が選ばれている。

この映画は製作予算100万円を始められた。これは、ある意味で無謀な試みであ

ったと言えなくもないが、とにかく映画は完成し上映されたのであり、レトロバス復元事業の象徴のひとつとなった。

こうした映画製作は次節で述べる「広島かよこバス活用委員会」で決定されたのであった。

5.3. 横川—長束・祇園—可部の連携

(1) 広島かよこバス活用委員会

バスの復元、子ども音楽劇「レトロバス物語」の上演、2004（平成16）年3月28日の横川から可部へのパレードは一気呵成に進められた感がある。しかし、こうしたレトロバス（かよこバス）を中核にした運動を持続させるためには新たな組織が必要であった。かくして、2005（平成17）年1月20日に「広島かよこバス活用委員会」が設立されたのである。三篠地区社会福祉協議会会長の水戸川旭氏が会長となり、総務部・広報部・お祭り部・お広場部の4部会が設けられることになった。

広島かよこバス活用委員会が2005（平成17）年に行った主要な行事として、①横川—可部間バス走行100周年記念事業としての「かよこバス100年祭」（2月5日）、②映画「横川サスペンス」の製作、③広島の代表的な祭りであるフラワー・フェスティバルでのパレード参加（5月3日）、④かよこの嫁入り祭（9月4日）を挙げるができる。

2005（平成17）年9月から12月にかけて、「わたしのまちが主役です、八つの区の魅力自慢」と銘打たれて、「ひろしま^{はっく}覧会^{はっく}八区物館」事業が展開された。上述の④の「かよこの嫁入り祭」はこの事業のオープニング・セレモニーとして位置づけられ、広島市から180万円の予算が付けられたのであった。また、「かよこの嫁入り祭」には広島市長秋葉忠利氏も出席され挨拶を述べられた。

今回の嫁入り祭では、横川地区・可部地区に加え、長束・祇園地区が新たに加わることとなった。横川は広島市西区にあり、可部が広島市安佐北区にある。この2つの区の間にあるのが安佐南区である。長束・祇園地区は安佐南区にあり、かくして、「かよこの嫁入り祭」は、広島市西区・安佐南区・安佐北区という3つの区を連ねるイベントとなったのである。

この3つの地区の代表と広島市の職員・3つの区の職員を含めた全体会議は、全部で7回開催された（5月12日、6月3日、7月1日、7月15日、8月4日、8月18日、8月27日）。そして、9月4日に「かよこの嫁入り祭」が行われた。3つの地区での取り組みについて論ずることにしよう。

(2) 横川地区の取り組み

横川在住の「かよこ」さんが、可部在住の「武吉」と結婚するというのが「かよこ物語」の筋書である。そこで、「かよこ」と「武吉」の結婚式が横川地区のイベントのメインであった。そして、このイベントは「ひろしま八区覧会八区物館」事業のオープニング・セレモニーの役割も兼ねていた。

その後、かよこバス・かよこ・武吉・その他のパレード参加者は長東・祇園地区へと向ったのである。一方、横川地区では、前日（9月3日）より公開された・映画「横川サスペンス」のPR イベント等が続けられた。

(3) 祇園町商工会の取り組み

筆者の1人（吉澤）に、横川商店街振興組合副理事長であり・広島かよこバス活用委員会事務局長の村上正氏より、「長東・祇園地区もかよこの嫁入り祭に参加しませんか」と打診があったのは、2005（平成17）年2月6日のことであった。広島経済大学としてこの申し出を受け入れる一方で、祇園町商工会に「かよこの嫁入り祭」への参加の有無を問い合わせた所、祇園町商工会会長の桑本義弘氏より、「参加する」とのお返事をいただいた。かくして、長東・祇園地区でのイベント実施主体は、①祇園町商工会、②広島経済大学、の2つとなった。

祇園町商工会の取り組みの目玉は、かつてバスが走った長東・祇園地区の道路でバスを走らせようとする試みであった。かよこバスにはエンジンもついて自走できる。しかし、法律上このバスは公道を走ることを許されていない。だからこそ、「せめて映画の中だけでもバスを走らせてみたい」というのが、映画「横川サスペンス」製作の動機のひとつであった。従って、早くからバスの復元に関わっていた人々は、「祇園町商工会の試みは失敗するに違いない、警察がそんなことを許すはずがない」と思っていたふしがある。

しかし、祇園町商工会会長・桑本義弘氏、同理事・奥田温氏達の獅子奮迅の活躍によって、広島北警察署の担当者を説得し、かよこバスの走行を可能にしたのである。但し、かよこバスの公道での自走は許されていないため、ロープでバスを引っばるといった形になった。この間、2車線の道路の一方は通行止めとされた。

このようなことに北警察署が同意したのは、防犯活動の推進には地域の協力が不可欠であり、祇園町商工会を中心にした申し出を無下に断わるわけにはいかない、という配慮が働いたものと推測される。

(4) 広島経済大学での取り組み

広島経済大学での取り組みを進めるに当っては、最初の数カ月は、吉澤と、入試広報室課長補佐の深川敏一氏の2人で作業を進めた。我々2人が念頭に置いたのは、①いかに魅力的なイベントを実施するか、②いかに多くの学生を参加させるか、ということであった。最終的には、学友会、ボランティア組織「レインボーキッズ」、放送部、ダンス部等100名以上の学生が参加してくれた。また、教職員も20名以上が参加した。そして、安佐南区役所の山崎義男氏・栗栖光明氏・吉村正美氏にもお手伝いいただいた。

5.3.(1)で、9月4日の「かよこの嫁入り祭」へ向けての全体会議は7回開かれたと述べた。学友会会長の村本圭隆君、レインボーキッズの石井啓友君には、最初からこの全体会議に同道してもらった。また、放送部の岸水友孝君・吉原祐貴君にも、何度か会議に参加してもらった。

広島経済大学での取り組みの目玉のひとつは、「ものづくり（水鉄砲、うぐいす笛、竹食器）」と「昔の遊び（竹馬、けん玉、おはじき、ビー玉）」であった。学友会とレインボーキッズの学生達がこれらの事業を取り仕切ってくれた。

いまひとつの目玉は、ステージでの「かよこ」歓迎セレモニーであった。このセレモニーのシナリオ作成、司会進行は、植木佑輔君を中心にして放送部が受け持つ



写真5-2 「かよこの嫁入り祭」の横断幕
西川美江氏（広島経済大学入試広報室）撮影

てくれた。

最後にエピソードをひとつだけ紹介しよう。9月4日の昼ごろから、2日後に中国地方を襲った大型台風の影響で雨が降り出し、テント等を片づけるころにはドシャ降りになった。関係者全員下着まで濡れるほどの大雨の中で作業を進めたのである。ところで、テントは20張あり、祇園中学校から借りたものであった。台風が来ることが分かっており、テントを会場に残しておくこともできず、かといってたんで屋内にしまっておくならカビが生えるという心配があった。そこで、仕方なく、テントをクリーニング業者に出してクリーニングしてもらうことにした。

しかし、クリーニング代はなかった。そこで、広島経済大学の教職員で行った焼うどん販売で得た収益をクリーニング代に充てたのである。尚、この焼うどんは、新庄みその「三十路かよこのみそ煮込みうどん」という名の味噌を用いて作ったものである。この味噌は、「かよこバス」をめぐる一連の動きの中で開発された商品である。商品開発については、6.2.で改めて論ずることにする。

(5) 可部での取り組み

可部地区でのイベントの目玉は、旧街道を午後3時から5時まで歩行者天国として・そこで行われるパレードであった。当初、警察は歩行者天国の案に難色を示したそうだが、長束・祇園地区の場合と同様〔5.3.(3)参照〕、「防犯活動の推進には地域の協力が不可欠であり、地域をあげての要請を断わるのは賢明ではない」という判断が働いたようである。

パレードのメニューを紹介しよう⁽⁴⁸⁾。嫁入り行列、神楽の笛・太鼓(亀山神楽団)、仮装行列(地元町内会・可部高校の有志)、子どもを乗せたかよこバス(可部高女子)、子どもみこし(可部フットボール・可部高)、若者みこし(可部高校)、古武道(可部高校柔道部・空手部)、花踊り(広島県民踊協会)、横川・祇園の応援隊、インラインスケートでの露払い(市民病院)、吹奏楽パレード(広島県警音楽隊)、ボーイスカウト行進、バトントワリング(可部バトントワラー)、と実に盛りだくさんである。老若男女がこぞって参加する、という感がある。

我々広島経済大学の関係者(安佐南区役所の、山崎・栗栖・吉村の3氏を含む)が、ドシャ降りの雨の中で後片づけをしているころ、可部地区でパレードが行われたのである。しかし、あまりの雨のためパレードは大幅に切り詰められることになった。そのため、パレードで十分なパフォーマンスを示すことができなかった若者

(48) 可部旧街道地区まちづくり協議会『可部旧街道 かわらばん・第16号』, 2005年8月17日。

グループの幾つかが、地区の集会所で、パレードで展開するはずであったパフォーマンスに興じていたそうである。

広島経済大学での取り組み、可部での取り組みから判断するに、若者の参画が地域活性化事業の成否を握るカギのひとつである、と言えるだろう。

第6章 新しいビジネス・モデルの模索

6.1. 祭りの継続可能性と資金調達

(1) 祭りの効能と継続可能性

祭りの最大の効能は地域の活性化ということであろう。多くの人が集まり、おカネが使われるなら、その活性化効果は大きい。更に、祭りを「創り」上げていく人々にとっての効能にも無視できないものがある。祭りを実施するためには多くの人々との協力が不可欠であり、こうした協力を介して新たな人間関係が形成される。次に、自分も祭りを創造する過程の一端を担ったという「創造」の喜びがある。最後に「変身」願望が満たされる。人には、「変身」願望があるようである。祭りに主体的に参画することによって、この変身願望が満たされ、日々の生活の中にアクセントが生まれるのである。

このように多大の効能を持つ祭りではあるが、それが継続されるためには幾つかの要件が満たされねばならない。人と金が、祭りを継続させる上で最も重要なポイントである。

横川商店街は6つの商店街によって構成されている、ということをも1.1.(1)で述べた。これら6商店街の商店経営者の有志(約100店舗)が、「横川商店街の活性化」を目的として形成しているのが「横川商店街振興組合」である。そして、その理事長が松本朝海氏であり、副理事長が村上正氏である。これとは別に、6つの商店街の全店舗を組織化したものが、「横川商店街連合会」である。「横川商店街振興組合」と「横川商店街連合会」とは、うまく連携し合っているとのことであるが、両者の役割分担がどのようになっているのかは、筆者達はまだ十分理解できていない。

さて、「横川商店街連合会」会長の三浦義次氏に、祭りの継続可能性についてお話を伺った。まず、人の問題から見ていこう。「祭りを企画したり、そのために必要な様々な作業を統括するという仕事」と、「実際の様々な作業」を分けて考える必要がある、と三浦氏は指摘された。「実際の様々な作業」のために各商店から人を出すためには、その間店を閉めねばならない場合もあり、その点への配慮は不可

欠であるというのが、「横川商店街連合会」会長としての、三浦氏のスタンスであった。

また、祭りのために企業に資金提供を仰ぐためには、「資金提供にはメリットがある」と企業に思わせる必要があり、それは容易ではない、ということも三浦氏は指摘された。

(2) 祭りの企画・立案と諸種の作業の統括

祭りの企画・立案において最も重要な役割を演じているのが、三篠公民館勤務（初校時追記：2006年4月に福本氏は異動になった）の福本英伸氏であり、諸種の作業の統括において最も重要な役割を演じているのが、「横川商店街振興組合」副理事長であり「広島かよこバス活用委員会」事務局長の村上正氏である。「広島かよこバス活用委員会」の今後のあるべき姿について、何人かの人にお話を伺った。しかし、それに言及する前に、2005（平成17）年9月4日の、「かよこの嫁入り祭」での広島経済大学における取り組みで中心的な役割を演じてくれた2人の人物の意見を紹介しよう。広島経済大学学友会会長（当時）の村本圭隆君と、ボランティア組織「レインボーキッズ」のメンバーである石井啓友君である。

村本・石井両君共に「参加してよかった、達成感が大きかった」と言ってくれた。さて、5.3.(4)で、「かよこの嫁入り祭」の全体会議に、最初の段階から村本君・石井君に参加してもらった、ということ述べた。彼らが会議に出席して感じたということは全く一致していた。彼らは、一方で、「かよこの嫁入り祭は本当に成功するのかな、広島かよこバス活用委員会という組織はしっかりしたものなのかなあ」と感じながらも、他方で、会議に出席している人々の「祭りを成功させようとする執念」に驚いたそうである。彼らの意見は問題の核心に迫っている。

筆者達が「広島かよこバス活用委員会」に対して抱いている懸念は、①事務局長の村上正氏に過大な負担がかかり過ぎているのではないか、②福本英伸氏が三篠公民館から異動になった場合にどうなるのだろうか、ということである。前者の懸念に対して、「おやじ活性化委員会」のメンバーであり・写真家の松浦康高氏は「NPOを立ち上げるべきである」と主張している。

しかし、「NPOを立ち上げる」というのは、余り評判が良くないようである。三篠地区青少年健全育成連絡協議会副会長の神村登紀恵氏、同会計の船木桂子氏は、共に、NPOの立ち上げには反対である、と明言したのである。「NPOにすると個性がなくなる」というのがその理由である。とはいえ、両氏が現状に満足しているかということ、必ずしもそうではない。福本氏が次々に生み出すアイデアが関係者に

スムーズに伝達されているとは言い難い、福本氏が異動になった時にはどうなるか不安である、という懸念が示された。

しかしながら、上述の神村氏や船木氏も含め、「かよこバス」に関わりを持つ人々の多くが福本氏の才能を高く評価し、それをしほませることは何としても避けたい、と考えているように見受けられる。その点は、「広島かよこバス活用委員会」会長の水戸川旭氏も同様である。同氏は、「現状の体制で行ける所まで行きたい、但し、事務局機能は強化する」という考えを示されたのである。

(3) 資金集めの新機軸

福本氏を中心にして、資金集めの新機軸が打ち出された。その仕組みは次の通りである。

1. 100万円拠出したものを「オフィシャルスポンサー」とし、40～50万円拠出したものを「準オフィシャルスポンサー」とする。その他に、10万円拠出の協賛企業を募る。
2. オフィシャルスポンサーは、「かよこバス活用委員会」製作の・「かよこ」のアニメ動画を使った嫁入り祭のテレビCMを打つことができる。
3. スポンサー並びに協賛企業は、新商品に「かよこ」のデザインを利用できる。

オフィシャルスポンサーとして、①オタフクソース株式会社、②カルビー株式会社、③新庄みそ株式会社、④広島文教女子大学・附属高等学校・附属幼稚園、の4者が名乗りを上げた。

6.2. 商品開発

(1) 新商品の開発

上述の協賛企業のひとつが広島駅弁当株式会社であり、同社は「嫁入りかよこの幸せいっぱいめでた寿司」という弁当を新たに作った。1日50個程度の売り上げがあるとのことである。

オフィシャルスポンサーとなったオタフクソース株式会社では、「晴れ寿司酢」「べっぴんかよこのすっぴん酢」という新商品が作られた。また、新庄みそ株式会社では、5.3.(4)でも言及した「三十路かよこのみそ煮込みうどん」と命名された味噌が開発されたのである。

(2) カルビーの場合

「かよこの嫁入り祭」に資金提供をすれば「地域に貢献する企業」というイメージを高めることができるというのが、「広島かよこバス活用委員会」がスポンサーや協賛企業を募る時の謳い文句のひとつである。筆者達は、新庄みそ株式会社の元取締役の沖田勇三氏、同開発・マーケティング部部長山本美香氏に対して行ったインタビューを通して、「味噌は地域性の強い商品である」ということを知った。そうであるなら、「新庄みそ株式会社は地元広島に貢献する企業」というイメージを高めることには意義があろう。また、オタフクソース株式会社中国支店量販グループの坂本公康氏によれば、オタフクソース株式会社は、既に全国展開を遂げているとはいえ、その主力商品であるお好みソースは「広島風お好み焼き」と切っても切れない関係にあり、広島企業というイメージを高めることには意味がある。

それに対して、カルビー株式会社は広島発祥の企業であるとはいえ、既に全国展開を遂げているのみならず、「広島」という土着性を売りにはしていない。それでは何故に、カルビー株式会社は「かよこの嫁入り祭」に100万円も出資したのであろうか？ カルビー株式会社広島エリアオフィス営業所長・筑本哲司氏の答えは、概ね、次のようなものであった。

カルビーという会社は、全国区と地方区の両立を目指し、そのために地域カンパニー制を採用している。また、①生産された商品をできる限り早く消費者に届け（鮮度保持）、②低価格競争は行わず、商品の質にこだわり、地域の味覚にも配慮する、ということを二大指針としている。これらのことを実現するために、それぞれの地域に工場を建てる。また、良いプロモーションを行って商品の回転率を高めるために、販売促進・ネットワーク構築の経費としての「地域活動費」を計上している。以上が、筑本氏から伺ったお話の概要である。「かよこの嫁入り祭」への拠出には、「地域活動費」が充てられた、とのことである。

(3) 「安い」商品から「客を満足させる」商品へ

フレスタという会社は、低価格路線と一線を画し、優良顧客の囲い込みに注力している、ということをも2.3.で述べた。このフレスタの方針と、カルビーの指針には大いなる親和性がある。そして、そこで求められているのは、『「安い」商品から「客を満足させる」商品への転換』を目指しての、新たなビジネス・モデルの模索である、と解釈できる。

このような新たなビジネス・モデルの模索に関しては、新庄みそ株式会社もオタフクソース株式会社も、カルビー株式会社と同様の指向を持っていることを、筆者

達の行ったインタビューで感得することができた。その際、「広島かよこバス活用委員会」のメンバーであると同時に・株式会社フレスタの常務取締役である山城武之氏が、一方における流通業者（フレスタ）と、他方におけるメーカー（新庄みそ、オタフクソース、カルビー）のつなぎ輪の役割を果しているのである。

(4) まちの活性化

広島駅弁当株式会社顧問の浜口豊彦氏の尽力で、同社の「嫁入りかよこの幸せいっぱいめでた寿司」という弁当が作成されることとなった。この浜口氏は、株式会社ロイヤルホテルの顧問も勤めておられる。

浜口氏は、ロイヤルホテル顧問の方に軸足を置きながら、「まちが活性化しないと、ホテル業も繁盛しない」と述べておられる。そういった意味からも、「かよこバス」をめぐる一連の運動は重要だというのである。

これは、フレスタ、カルビー、オタフクソース、新庄みその視座とは、少し異なったものである。この浜口氏の議論に、別の角度から光を当ててみることにしよう。

6.3. グローバル化とローカル化

(1) 経済のグローバル化

2.2.(2)で、「グローバル経済の進展」について述べた。この「グローバル経済の進展」、あるいは「経済のグローバル化」が何を意味するか、正確に定義することは容易ではない。というのは、様々な人が様々なことを述べているからである。とはいえ、最大公約数的な共通項は存在する。「国家間における経済の相互依存の高まり」というのがそれである。⁽⁴⁹⁾そして、その象徴とも言うべきものが「金融のグローバル化」である。

1990年代以降、「金融のグローバル化」は急速に進展し、その弊害も顕わになった。その弊害が最も典型的な形で現われたのが、1997（平成9）年に起った、アジアの通貨・金融危機であった。同年7月2日に、タイの通貨バーツの対ドル価値は暴落し、タイ経済は非常な混乱に陥った。タイから大量の短期資本の流出が起ったことの結果であった。タイで起った混乱はマレーシア、インドネシア、韓国等へも波及していった。

とりわけ、インドネシアは甚だしい打撃を受け、国家解体の危機にすら直面したのである。また、第二次世界大戦後の経済成長の成果の多くが吹き飛んでしまった。

(49) 吉澤昌恭『社会政策の基礎』法律文化社、2006、特に第Ⅲ部を参照されたい。

こうしたことが起った以上、「金融のグローバル化」を手放しで賞賛することは難しくなった。「金融のグローバル化」は性急に進められてはならず、手順を踏んで進められるべきである、とする経済学者が増えた。そして、そうした経済学者は、歴史的に形成されてきた・地域社会のネットワークの重要性を説く傾向がある。

(2) 企業の地域貢献・社会貢献は可能なのか？

「はじめに」で、横川商店街から始まった動きを把えるための3つの切り口を示した。それは以下のようなものであった。

1. 横川商店街の活性化は進んでいるのか？
2. 人が主体的に生きるとはどういうことか？
3. (大手) 企業の地域貢献・社会貢献は可能なのか？

「3 → 2 → 1」の順に論じて、本稿のまとめとしよう。

企業の地域貢献・社会貢献を論ずるに当っては、①世界中の顧客を視野に入れているグローバル企業、②日本全国の顧客を視野に入れている企業、③日本国内のある地域の顧客に焦点を合わせている企業、に分けて考える必要があろう。①は、今回の我々の研究対象には入ってこなかった。

今回我々が取り上げた企業の内、②に分類できるのは、カルビーとオタフクソースであった。「広島企業である」ということを「売り」にするにせよ（オタフクソース）、しないにせよ（カルビー）、いずれも「地域の優良顧客の囲い込み」という観点に立って、地域貢献に意義を見い出しているようである〔6.2.(2)~(3)参照〕。

今回我々が取り上げた企業の内、③に分類できるのが、フレスタ、新庄みそ、広島電鉄であった。フレスタが地域との結びつきを重視していることは、2.3.で述べた。また、新庄みそにとって、「地元広島に貢献する企業」というイメージを高めることには意義がある〔6.2.(2)参照〕。

広島電鉄の場合には、以上の4社とは少し異なった角度から迫る必要があろう。同社には、「路面電車を媒介にして街づくりに貢献する」という視座があるようである〔4.1.(3)参照〕。

すべての企業が地域貢献・社会貢献を重視しているとは思えないが、本稿で取り上げた企業は、それを重視しているように見受けられる。従って、「企業の地域貢献・社会貢献は可能なのか？」という問に対する答えは、「イエス」ということになろう。

(3) 人が主体的に生きるとはどういうことか？

レトロバスの復元や「かよこの嫁入り祭」に関わってきた人々は、その能動性という観点のみから判断しても、主体的に生きていると言ってよからう。さて、人が能動的に活動できるためには、その人が自らの「生」を肯定している、あるいは、自らのアイデンティティを確立している、ということが不可欠だと思われる。キッチンとした土台ぬきには、未知の領域への飛翔など不可能だからである。

人が自らの「生」を肯定できたり、自らのアイデンティティを確立できるためには、①自分と他者との関係が良好に構築・維持されている、②先祖・自分・子孫の流れを感得できる、という2つの条件が必要である——これが本稿の筆者の1人である吉澤が主張してきたことである。

そうした条件を満たした人であればこそ、「レトロな」バスを中軸にした「祭り」に参加できたのであろう。そして、その祭りに参加することによって、参加者の横の関係（他者との関係）並びに、縦の関係（過去、あるいは先人との結びつき）が強化され、そのことによってその主体性に磨きがかかり、運動に新たなエネルギーが付加されているのであろう。

(4) 横川商店街の活性化は進んでいるのか？

アストラムライン開業の衝撃を受けて〔1.2.参照〕、横川商店街の人々は、商店街の環境整備に取り組み〔1.3.(1)参照〕、「横川ふしぎ市」を開催し〔3.1.参照〕、「アーティストにやさしい街づくり」を目指し〔3.2.参照〕、遂には、「レトロバス」の復元事業を展開するにまで到った〔第4章～第5章〕のである。

「はじめに」で紹介したように、「横川商店街振興組合」副理事長であり、「広島かよこバス活用委員会」の事務局長である村上正氏は、横川はメディアによく取り上げられたりするが、商店街としてはまだまだ苦闘が続いている、と考えておられる。

本稿で取り上げた第3の間（企業の地域貢献・社会貢献は可能なのか？）、第2の間（人が主体的に生きるとはどういうことか？）に対しては、それなりの答えを導き出すことができた。しかし、第1の間（横川商店街の活性化は進んでいるのか？）に対しては、筆者達は必ずしも明確な答えを見出し得たわけではない。活性化の試みはそれなりの成果を上げているように見えるが、それが個々の商店の繁栄へとつながるかどうかは、今後を待たねばならない。

[追記]

2006年5月1日、本稿の主要執筆者である吉澤昌恭先生（本学学部長）がご逝去された。53歳という若さであった。共同研究者一同、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。